誣

Akashi

証

永遠のシャウト

●ジョー山中

1946年、横浜生まれ。内田裕也氏に見出され、68年、「フラワー・トラベリン・バンド」を結成。70年からカナダに渡り、リリースしたアルバム『SATORI』が同国のヒットチャート1位を獲得。バンド解散後の77年には、映画『人間の証明』出演とその主題歌が大ヒットし、注目を浴びる。以降、音楽プロデュースや役者など領域を広げ、さらに90年代にはボランティア活動も精力的に開始。アルバムに『レゲエ・ヴァイブレーション1～3』(ボブ・マーリィ亡き後の「ウェイラーズ」とのアルバム制作)、『W's』など。

あかし
証
永遠のシャウト

著者　ジョー山中

2001年6月30日　初版

発行者　松下武義
発行所　株式会社 徳間書店　〒105-8055　東京都港区東新橋1-1-16
電話　03-3573-0111（大代表）振替　00140-0-44392
本文印刷所　本郷印刷㈱
カバー印刷所　近代美術㈱
製本所　ナショナル製本協同組合

©Joe Yamanaka 2001
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

編集担当　柳　久美子

ISBN4-19-861365-6

まえがき

オノ・ヨーコさんが俺のことを指して、〝WAR　BABY〟と表現したという。

正確にはこうだ。

「ジョーは第二次世界大戦が産んだ〝WAR　BABY〟よ。大事にしてあげて」

ある日ニューヨークで、彼女が内田裕也さんにいった言葉のようだ。そのとき、裕也さんは酔っぱらっていたらしいが。

〝WAR　BABY〟

戦争の子。

俺は一九四六年九月二日に生まれた。日本の敗戦からちょうど一年後だ。このころ生まれた連中は、後に「ベビーブーマー」とか「団塊の世代」と呼ばれ、良くも悪くも日本の社会をガラリと変質させるようになる。

だが、もちろん当時は誰もそんなことを夢にも思わず、親も子も、食うことに必死でいた。そして街には戦争で焼け出され、親とはぐれた子供が溢(あふ)れていた。浮浪児とか、戦災孤児といわれる子供たちだった。その意味では、あらゆる日本の子供が〝WAR BABY〟だったわけだが、俺の場合は事情がちょっと違う。

まあ、俺の生い立ちは追って記すとして、ともあれ俺は戦後の日本で半世紀あまりを生きてきたことになる。同時に、その日本の半世紀は、日本人から戦争の記憶を風化させるためにあったような気もする。

高度成長があり、公害があり、安保があり、学園紛争があった。

偏差値教育があり、バブルがあって、少年犯罪がある。

でも戦争はなかった。

俺はたまたま音楽と巡(めぐ)り会い、おかげで今、こうして自分の歩いてきた道を振り返る余裕も与えられている。ただ何というのだろう、音楽とともに年を重ねるうちに、無性(むしょう)に子供のころを思う自分に気づくようになった。そして、その思いはなぜか日増しに強くなるようだ。

俺自身、三人の子供の父親なのだが、最近は音楽をやる一方で、子供たちへのボランテ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ィア活動にも加わらせてもらっている。つらい境遇にある世界の子供たちに、歌を届けるというような活動を、この一〇年ほど続けている。

音楽の仕事の関係では、俺も世界各国に足を運んだ。けれどもボランティアで訪れる国のありようには、演奏やレコーディング目的で行く土地と正反対の景色が見える。そこには、日本では絶滅した〝WAR　BABY〟が、たくさんいた。いや、今日も生まれ続けている。

俺は別に教育者ではないし、宗教家でもない。もっといえば逮捕歴もある。だから偉そうなことをいうつもりもない。ただそうした現実があるということだけは知ってもらってもいいんじゃないかと思う。

外国の難民キャンプにいると、「家族」とか、「平和」という言葉が無意識のうちに胸に浮かぶ。それで視線を一八〇度変えると、日本では親が子供を折檻(せっかん)して死なせたとか、その逆のケースとか、とても一昔前の日本の家庭像とはかけ離れた事件が日常茶飯事に起きている。

気恥ずかしいけれど、俺の半生を綴(つづ)ることで、そんな家族や平和ということについて、少しでも思いを馳(は)せてもらえれば嬉しい。

装幀・カバーフォト　池野　徹
題字　本木雅弘
プロデュース　本多　圭

証

永遠のシャウト

Akashi

目次

まえがき ―― 1

序章　五〇年前の俺がいた ―― 世界の難民の現場から

ロックを歌うサンタクロース ―― 13
施設が俺の家だった ―― 15
三万五〇〇の生命（いのち）が消えていく ―― 17
これは映画じゃない！ ―― 20
粉ミルクの争奪戦 ―― 22
歌うことしかできなかった ―― 24
死を待つ子たち ―― 26
俺は恵まれていたのか？ ―― 29
原点のカンボジア ―― 32
『君の待つ国へ』行こう ―― 34

第一章　なぜ俺だけ色が違うんだ

父は黒人GI、だが顔も知らない ―― 41

血を吐いた小学生 ―― 44
差別という体験 ―― 46
流されて流されて ―― 51
協栄ジムのスカウト現る ―― 54
ボクサー・城アキラ ―― 57
俺、力石徹状態になる ―― 60
運命の喫茶店 ―― 62

第二章　ファッキン・ロックンロール

『ハウンド・ドッグ』しか歌えない ―― 69
グループサウンズのはみ出し者 ―― 71
内田裕也のぶっとび伝説 ―― 75
オナニー・オン・ステージ ―― 78
時代と寝た「フラワー・トラベリン・バンド」 ―― 81
日大全共闘、日比谷野音に乱入す ―― 83
そして俺たちは世界を目指す ―― 87

カナダで『SATORI』、一位をGET！ ―― 89
「ぜひ会いたいね」、D・ボウイがいった ―― 92
幻の「ストーンズとの共演」 ―― 96
音楽が〝武器〟だった日々 ―― 98
信念ある者だけが生き残る ―― 100
〝現実が内田裕也を追いかけてくる〟すごさ ―― 103
日本に俺たちの居場所がない！ ―― 105
醒めてしまった俺がいた ―― 108
「芸能界」という煮詰まる現実 ―― 111

第三章　鉄格子の向こうには何が見えたか

求む、映画『人間の証明』のジョニー役 ―― 115
「母さん、僕のあの帽子、どうしたでしょうね？」 ―― 118
中国の大地に『草帽歌』が流れる ―― 124
刑事はレコード発売日にやって来た ―― 126
逮捕・勾留・取り調べ ―― 130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

腹筋運動と『宮本武蔵』 133
護送車の窓から見た映画ポスター 135
「麻薬歌手」に会場は貸せない！ 139
兄貴の申し出 142
いったい客は入るのか？ 144
来てくれた！ 146
砂の城 149
歌は誰を救ったか？ 153

第四章　そして、血は世界へと繋がりゆく

一触即発　in　ポルトガル 159
むちゃくちゃだった女性関係 162
女房を泣かせて 165
再婚披露宴のオノ・ヨーコさん 167
スウェーデン人女房との亀裂 171
その日、妻も子もいなくなった 173

わが子との電話関係 ―― 175
父である自覚 ―― 178
反面教師でいいさ ―― 181
今、地球の子たちは幸せなのか ―― 183
俺は世界の子とコミットし続けたい ―― 186
わが子よ、その混血を誇れ ―― 189

第五章　俺たちの挑戦は終わらない

トーク・セッション
舘ひろし×ジョー山中

俺たちのカンボジア慰問体験 ―― 195
暴走族とロック野郎が出会ったとき ―― 200
パトカーから逃げて逃げて ―― 204
「ジョーに俺、ちょっとコンプレックス」 ―― 209
若者から「政治」が消えて…… ―― 213
お子さま文化、ニッポン ―― 217
もっと大人の連中を引っぱり出したいんだ ―― 222
あとがき ―― 227

序章
五〇年前の俺がいた
――世界の難民の現場から

ロックを歌うサンタクロース

一、〇〇〇年一二月二三日、俺は神奈川県の葉山にいた。葉山町福祉文化会館で開かれる「幸保愛児園　クリスマスの集い」に参加するためだった。

その日のプログラムを開いてみると、こうなっている。

1　歓迎の言葉
2　来賓挨拶
　　葉山町町長　守屋大光様
　　在日米海軍司令官少将　ロバート　C．チャップマン様
3　劇『世界ではじめてのクリスマス』
4　感謝状贈呈
……
……

神奈川県社会福祉協議会会長表彰　山中明様

……

5　演奏　スウィングバンド　幸保エバーグリーンズ

プログラムの端っこに、「ボランティア出演　ロック歌手　ジョー山中様〔卒園生〕」とある。

そう、幸保愛児園は、俺がガキのころを過ごした児童養護施設だ。

また、種を明かせば、「感謝状贈呈」にある「神奈川県社会福祉協議会会長表彰　山中明様」の「山中明」は、俺の本名だ。

俺はこの「クリスマスの集い」に、一九九二年から出るようになった。もともとは、中学時代の友人が葉山で俺のコンサートを企画してくれたとき、その収益金を幸保愛児園に寄贈することになったのがきっかけだった。コンサートを終えた俺は、現園長である金子エスター聖美（きよみ）さんのお父さん、つまり俺がいたころの園長先生に収益金を手渡し、その年の「クリスマスの集い」に出席することを約束した。それが卒園以来、実に三〇年ぶりの里帰りだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com